



ぶらり 東京江戸散歩

浅草編

江戸文化歴史検定1級合格者
今野大輔

はじめに

本書を手にとって頂き、ありがとうございます。本書では私が5年間浅草の人力車車夫として地域の方々にご理解いただきながら観光のお客様に街を紹介させていただき得た経験と江戸文化歴史検定1級の合格に向けて学ぶ過程で得た知識を元に、僭越ながら浅草のガイドブックを作成させていただきました。ただの情報の羅列では面白味がないので、実際にお客様をご案内しているようなストーリー仕立てで書かせていただきました。

この内容を丸々覚えるだけで、浅草のガイドができるようになるくらい出し惜しみせず書かせていただきました。純粋に浅草を楽しくお散歩されたい方はもちろん、仕事として国内外のお客様をご案内されている方にも活用していただける内容になっています。少々会話調で書いているので、不適切な表現があるかもしれませんが、ご容赦頂けると幸いです。

まず簡単ですが、浅草とはどんな街なのかという全体的な概要をお伝えします。浅草は東京都内でも最古の歴史を誇り、江戸時代は江戸随一の繁華街として、明治大正昭和初期は庶民の流行の最先端の地として栄えた一方で、度重なる火事、関東大震災、東京大空襲で甚大な被害を受けながら幾度となく復興してきた街です。その後、高度経済成長の際も鉄道の発達で渋谷、新宿などへの若者層の流出に逢い一時は衰退するも、羽田空港、成田空港、品川駅などに繋がる都営浅草線の開業などにより、見事に国内外の観光客の誘致に成功し、日本最大級の観光地へと転換を遂げてきました。古き良きものをしっかり残し、新しいものにチャレンジしていく江戸っ子魂溢れる街が浅草です。

さあそんな魅力たっぷりの浅草の特に江戸時代にフォーカスを当ててご案内させていただきます。では参りましょう。

雷門～仲見世を歩く

おい。ここですよ。ようこそいらっしゃいました。あなたが今日浅草巡りツアーに参加される方ですね。そんな道のと真ん中に突っ立っていたら人混みに飲まれてしまいますよ。浅草は江戸随一の歓楽街でいつでも人で賑わっていますから、うっかり立ってなどいられません。さあ寄って寄って。まず最初は雷門をくぐって浅草寺の観音様へお参りすることにしましょう。



ここが有名な雷門です。すごい人でしょう？この大きな提灯には「雷門」とデカデカと書かれていますが、その下には「松下電器」との表記もあります。なぜなら、この雷門は4代目で昭和35年（1960）にパナソニックの創業者の松下幸之助によって再建されたものだからです。当時、松下幸之助は関節痛を患っていて、それを浅草寺の貫主さんが祈禱してくださったそうです。その成果もあってか関節痛は快復しお礼として雷門を寄贈されました。こんなに人の集まる名所雷門に自分の会社名が入ったものですから、相当な宣伝効果があったんじゃないですかね。初代は天慶5年（942）ということで相当歴史も古いです。元々は駒形の方にあったそうで現在の場所に移って来たのは鎌倉時代以降と言われています。ちなみに歌川広重で描かれた雷門は3代目です。



※歌川広重作 名所江戸百景 浅草金龍山（国立国会図書館参照）

寛政7年（1795）に再建され慶応元年（1865）まであったんですが、火事で燃えてしまいました。つまり、慶応元年から昭和35年までの95年間は雷門はなかったのですね。そう考えると雷門を復活してくれた松下幸之助は浅草の大恩人です。



さて、仲見世を歩いていきましょう。たくさんのお店が並んでいますね。ほらほら、よそ見してばっかりいるとはぐれてしまいますよ。仲見世は日本最古の商店街とも言われていて現在もものすごい賑わっています。始まりは貞享2年（1685）ごろ浅草寺が周辺住人の方々に参道の掃除をする代わりに出店を許したと言われていています。これは今でも続く浅草文化でどんなに賑わっていても翌朝の仲見世にはゴミ一つなく綺麗なんですよ。



左手に立派な門が見えてきました。伝法院です。浅草寺の本坊で安永6年（1777）から残る建築物や、寛永年間（1624～44）に京都の二条城の庭なども作庭された小堀遠州の作品の庭があります。お客さんにも伝法院の中をお見せしたいのですが、普段は非公開なので入れません。もしよかったら春にでもきてみてください。桜の時期からGWにかけては毎年公開されていますので。



伝法院の向かい側も見てみてください。ここもたくさんのお土産屋さんが並んでいます、江戸時代はここを二十軒茶屋と呼びまして、20軒の水茶屋が並んでいました。ここの名物は店の看板娘で本当に美人揃いだったそうですよ。特に「明和の三美人」の一人と言われた鳶屋のお芳もここの娘さんでした。今で言えば、読者モデルのような、会いに行けるアイドルのような存在だったんじゃないでしょうか。何？その時代のここを歩いてみたかったって？まあまあ気を落しなさんなって。浅草にはまだまだ面白いところが御座いますから。



この大きな門が宝蔵門です。現在の物は1964年オリンピックイヤーに、あのホテルニューオータニの創業者大谷米太郎が寄贈したものです。江戸時代は仁王門と呼ばれ、一時期は紙を口の中で丸め、それを仁王像に投げつけ、それが仁王像の体にくっいたら願い事が叶うという、もし今やったらすぐに警備員さんが駆けつけてきそうな俗信が流行ったそうです。あれ？お客さん、何嚙んでるんですか？そんなことしちゃダメですよ。今のは昔の話で、、えっ、あっ、ガムね。安心しました。早く本堂に向かっていきましょう。



こちらの本堂は昭和33年（1958年）に再建されたものです。起源は西暦628年と伝えられ、隅田川で網漁をしていた漁師の兄弟檜前浜成・竹成（ひのくまのはまなり・たけなり）の網に観世音菩薩の仏像が引っかかり、それを兄弟の主人である土師真中知（はじのなかとも）が自宅に奉安したのが本堂の起源とされています。その後、645年になると勝海上人が寺として整備されました。



さあ、ちょっと階段を使って本堂に上がってみましょう。まずはこの大きな提灯を見てみてください。なんと書いてあるか分かりますか？「志ん橋」って書いてあります。読み方は「しんばし」です。これ実は平成16年に新橋の方々から奉納されたものなのですが、さっき僕が雷門でお見せした浮世絵覚えてますか？



※歌川広重作 名所江戸百景 浅草金龍山（国立国会図書館参照）

そうなんです。これ、3代目の提灯と同じ字なんです。江戸時代にタイムスリップしたみたいで、ちょっと嬉しいですね。さあ中に入ってください。



お賽銭する前に、この額縁に入った言葉をご覧ください。これが浅草寺のご利益です。『施無畏（せむい）』これは『恐れ無きを施す』つまり恐れが無い状態にしてくださるご利益があるのです。

あの幕末の幕臣側の剣豪山岡鉄舟も、よく浅草寺にきていたのですが、ある日弟子から「剣の極意とは何ですか？」という質問を受けたそうです。すると鉄舟は「それは全て浅草寺の観音様に預けてある。」と答え、どういうことかと思ひ、後日その弟子は浅草寺に行ってみると本堂に掛けられたこの「施無畏」という文字を目にし疑問が解消されたそうです。

剣を使った勝負というのは常に死との直面です。普通の人間なら死の恐怖から逃れられず力を充分に発揮できません。浅草寺のご利益である「施無畏」の状態であれば、死の恐怖にも屈せず勝負に臨めるということを伝えたかったのでしょう。

山岡鉄舟の他にも、かの有名な源頼朝や足利尊氏も浅草寺にお参りされていて、徳川家康も江戸時代初期の幕府の祈願所になっています。すごく武士に大切にされたお寺なんです。今の世の中、死と直面することは滅多にないですが、僕たちも失敗できない大勝負の時に浅草寺のご利益を頂きに来るといいですね。例えば、ビジネスマンであればビッグビジネスの商談前だったり、スポーツ選手なら大事な試合前だったり、学生さんなら試験前とかですかね。では、お賽銭を投げましょう。

実は浅草寺の境内には本堂の他にも色んなご利益を持つお堂がたくさんあり、別名ご利益の総合デパートと言われるほどです。特に寛永期（1624～1645）に徳川幕府の祈願所は浅草寺から上野の寛永寺に移ることになり、それに伴い浅草寺も武士の寺から庶民の寺へとシフトしていったのがきっかけでした。それによって、浅草寺は庶民の信仰の中心として様々な悩みを解消し、ご利益を得ようという庶民たちで賑わうようになっていったんですね。

少し周りを散策してみましょう。まず忘れちゃいけないのが、この浅草神社です。



三社様とも呼ばれ、先ほどお話しした。漁師の兄弟檜前浜成・竹成とその主人土師真中知が祀られています。浅草のお祭りと言えば、三社祭が有名ですが三社様とはこの御三方の事でそのお神輿もここにありますが。そしてこの社殿を見てください。慶安2年（1649）に三代目徳川家光が寄進された建物がそのまま残っています。東京大空襲、関東大震災も乗り越え国の重要文化財に指定されています。



少し奥まったこちらにも来てください。小さな神社ですが被官稲荷と言ひまして、浅草の有名な火消の組頭だった新門辰五郎が建てた神社で、実は京都の千本鳥居で有名な伏見稲荷の分社です。新門辰五郎が奥さんの病気の治癒を祈願するため伏見稲荷に行ったところ、奥さんはたちまち快復したとのことで、お礼の意味を込めて創建されました。

被官とは「官を被る」と書きますので、出世にご利益があるとされています。一火消が浅草に神社を建てるなんて只者ではありません。それもそのはず辰五郎は一火消から江戸きっての繁華街である浅草の組頭を任されるまで出世した人です。子分3000人を抱え、幕末には15代目徳川慶喜の京都上洛にも付き添ったそうです。

他にも入ってくるお金を自宅の押入れに投げ込んでいたら、溜まりすぎてその重みで床が抜けたという話が残っています。おっ、お客さん、そんなに熱心にお参りして出世希望ですか？出世したらは是非色々よろしくお願いしますね。



さあ今度はこっちです。こちらに見えるのが弁天堂です。弁天様と言えば、芸事にご利益があることで有名ですが、ここの御本尊は少し変わっていて「老女弁天」です。白髪であるため「老女」だそうです。弁財天界の老女様という事で芸事も熟達されていそうで、なんだかとてもご利益ありそうです。お客さんは何か上達されたい芸事はありますか？えっ、僕の方ですか？僕はそうですね。強いて挙げれば、、、バイオリンですかね。あっ、いや、一度もやった事ないです。



続いて隣もみてください。時の鐘です。5代目将軍徳川綱吉の命によって元禄5年（1692）に改鋳されたもので現在は毎朝6時と大晦日の除夜の鐘で鳴らされます。

ちなみに江戸時代はだいたい12時（0時）、14時（2時）、16時（4時）、18時（6時）、20時（8時）、22時（10時）のタイミングで9つ、8つ、7つ、6つ、5つ、4つと回数を変えて鳴らしました。ですので、お昼ご飯を食べる時間には9つの鐘が鳴ります。お昼食べた後、ひと休憩した後に食べる甘いものをなんと言いますか？オヤツですよ。では、9つの鐘の次は？8つですよ。八つ。そう。オヤツの語源は鐘八つ時からきています。

ん？そろそろオヤツにしたいって？じゃあさっき買っておいた浅草の芋羊羹を差し上げますよ。なんで浅草で芋なんだって？文句言わないで食べてください。ちゃんと説明しますから。お気づきの通り、浅草でサツマイモを栽培しているところはないです。

でも昔から芋問屋さんが多かったんです。なぜなら、隅田川が隣を流れていて上流をぐんぐん登っていくと荒川、新河岸川へと続き埼玉の川越に辿り着けるからです。川越周辺はサツマイモの一大産地で、そこから船で川を伝って浅草までサツマイモを持って来たのです。それでその芋問屋さん達が芋を使ったらスイーツの店に変わっていったんです。美味しいでしょう？

小腹を満たしたところでさらに歩きます。こちらは久米平内堂（くめのへいないどう）です。



江戸時代から続く恋愛のパワースポットなのですが、久米平内という人は実は人斬り。人斬りの元に沢山の人が恋愛成就を求めてくるとも奇妙なスポットです。

このお堂の中には久米平内が自分で自分を掘った石像が納められているのですが、これは元々その宝蔵門の前に埋められていたものです。生涯で本当に沢山の人を殺めてしまった後悔から、自分の石像を沢山の人が通る宝蔵門の前に埋め罪滅ぼしのために多くの人に踏みつけて貰おうとしたものです。それがいつの日か江戸っ子達に「踏みつけ」から「文付け」、つまり当時のラブレターに変換され、自分の恋心が相手に届きますようにとお願いするスポットに変わっていきしました。久米平内自身もビックリな展開でしょうね。

さあどんどん進みましょう。おっと、これを見てください。



なかなか達筆で読みづらいですが「南無大慈悲観世音菩薩まよひこのしるべ」と書いてあります。実はこれ江戸時代の迷子探しの掲示板です。右側には「しらする方」と刻まれていて迷子を預かっている人がその迷子の情報を紙に書いて貼り、左側には「たずぬる方」と刻まれ迷子を探している人がその迷子の情報を貼っておくというシステムです。

江戸時代はもちろんスマホ、ケータイありませんので、こんな人混みで逸れたらすぐに迷子になります。今以上に迷子に関する悩みも多かったんじゃないでしょうか。

あと「南無大慈悲観世音菩薩」と記載されているのは安政2年（1855）に起こった安政大地震によって亡くなった約1000人の吉原の遊女達を弔うための意味合いもあって吉原の妓楼の松田屋嘉兵衛という方が建てられたそうです。さあ迷子にならないようについて来てください。



五重塔の前に来ました。現在のものは昭和48年（1973）に再建されたもので、その前の五重塔は慶安元年（1648）に3代目将軍の徳川家光が寄進したものでした。その時代はこちら側ではなく本堂向かって右側であって国宝にも指定されていたんですよ。ちなみに五重塔ってなんのためものだと思いますか？これ実はお釈迦様のお墓なんです。五重の屋根は下から地、水、火、風、空を意味し仏教的な宇宙観を示しています。

そして中にはお釈迦様の遺骨である仏舎利が納められています。仏舎利は米粒くらいの小さな骨のカケラなんですが、日本人は米のことをシャリって言ったりしますよね。あれは、仏舎利を語源としているそうです。だから、米は日本人にとって昔から無くてはならないもので、その形も仏舎利に似ていることから大切にされてきているんですよ。子供の頃、「米一粒も無駄にしていけません」って母親から言われたのを覚えています、こういった思想が反映され引き継がれての日本の風習だったことがわかりますね。



次は本堂の裏手に回っていきましょう。この辺りは江戸時代は奥山と呼ばれていて、実は江戸随一の繁華街でした。芝居、浄瑠璃、操り人形、軽業、手品、講談、落語など見世小屋が並び、独楽回しや居合い抜きをして客寄せしながら歯磨き粉や腹痛薬を売る大道芸人がいたり、多い時なんかは、巨大な籠細工の見世物に約三ヶ月で40～50万人も人が集まるほどでした。また、ここにも看板娘を売りにした水茶屋や楊枝屋なんかも大変賑わっていたそうです。

ここ奥山の人気ナンバーワンの娘も「明和の三美人」の中の一人です。楊枝店の柳屋お藤です。



※左が柳屋お藤（ARC浮世絵ポータルベース参考）

楊枝店のすぐ隣に大きな銀杏の木もあったことで「銀杏娘（いちようむすめ）」の愛称で親しまれていました。「用事（楊枝）もないのに用事をつくり、今日も朝から二度三度」という詩が詠まれるほどの人気だったそうです。この浮世絵に描かれているもう一人は谷中の笠森お仙（一番右側）で、この三人の中でも人気ナンバーワンの娘だったそうで、沢山の浮世絵に描かれています。でも、どちらが美人かは自分の目で確かめたいのが人の心理。本当に大勢の人が店を覗きに来て、どちらが美人だとか、それぞれの意見を言い合っていたそうです。

どの時代もやることは変わらないですね。ちなみに、お客さんはどちらがタイプですか？ん？自分はぱっちりお目目の女性がタイプだから、どちらでもない？そんな元も子もないこと言わないでください。

（ガガガガガガ！！！！キャー——！！！！）おっと、花やしきで遊ぶ人達の叫び声が聞こえてきました。実はこの花やしきも江戸時代からある日本で最古の遊園地と言われています。



開園は嘉永6年（1853年）でペリーが浦賀に来航した年です。すごい古いです。ただ当初は、遊園地ではなく、森田六三郎が開園した牡丹や菊細工を中心とした植物園でした。花を鑑賞するためのお屋敷、ということで「花やしき」というネーミングなんです。その後、大正から昭和にかけては動物園になっています。実はライオンの赤ちゃんが日本で最初に生まれたのは花やしきだったりします。そして、戦後に今の遊園地になっています。

ここの名物は昭和28年（1953）に設置されたローラーコースターです。なかなか年季が入っている上、花やしき入り口付近には「行き場のないボルト」として完成時になぜか余ってしまった1本のボルトが展示されています。1本つけ忘れたのか、どこに付けられるはずだったのかは謎です。ある意味スリリングですね。でも安心してください。時速は42キロしか出ないそうです。

ちなみに人類最速の男は最速44.7キロだそうです。ボルトが余っているこのローラーコースターよりも最速時は速いです。さあ、その人類最速の男とは？そう！ウサイン・ボルトです！！ボルト違います！！失礼致しました。さあ、もう行きましょう。

隨身門へ

ちょっと二天門の方に向かいます。この二天門は慶安2年（1649）に浅草寺の東門として創建されたもので、修復もされながら今まで大切に保存されています。



それ以前は境内に徳川家康を祀る東照宮があり、それが火事により江戸城内に遷座されるまで二天門は東照宮への隨身門として使われていました。ですので、隨身門として使われなくなった後も江戸時代は隨身門と呼ばれることが多かったようです。
この隨身門を出た所にも水茶屋の名物看板娘がいました。難波屋のおきたという娘さんで、喜多川歌麿の作品「当時三美人」に登場します。



※難波屋おきたは右下の女性（千葉市美術館 収蔵品検索システム参照）

寛政期の作品なので、先ほどご紹介した蔦屋お芳や柳屋お藤よりも少し後の時代の人です。おきたは喜多川歌麿に最も多く描かれた美女で、ちょっと強気だが愛嬌バツグン、接客ハイレベルの評判娘でブームだった明和期以降下火だった水茶屋文化に再び火をつけました。いやあ、浅草は本当に美人が多かった街なんですよ。あっ、いや、美人が多い街なんですよ。そう言わないと、怒られてしまいますからね。笑

では、これから観音裏や吉原の方も案内していきましょう。ん？何だって？もう帰らなければいけない？浅草の街の面白さはここからですよ。でも仕方ない。いつでも、どこでも江戸に関してなら案内しますから、また暇なときいらしてください。では、お気を付けて。

参考文献

浅草寺HP <http://www.senso-ji.jp>

江戸の名所 小学館

江戸博覧強記 江戸文化歴史協会

新訳 鉄舟随感録 PHP研究所